

日本唯識研究

——如来藏思想の位置づけ——

太田久紀

一

法相唯識が、如来藏思想を批判する原点になるのは、成唯識論卷二の分別論者の説を述べるところである。

まず、分別論者の説は、次のように紹介されている。

分別論者は、……心の性は本より浄なれども、客塵煩惱に染汚せられたるが故に名けて雑染となす。煩惱を離れぬる時に、転じて無漏と成る。（新導六九頁）

つまり、心性本浄、客塵煩惱説である。論はこれに対して、心性とは何を指すのか。(1)もし空理を指すというならば、空は、心因ではない。(2)もし依他心を指すというならば、数論の自性諦と同類となろう。(3)もし有漏心の本性であるというならば、逆に無漏心の性は有漏であるという矛盾を生じよう。という三点で反論をして、心性本浄説を否認している。法相唯識の立場からは、依他心の性を空理として相即的な一面からのみ捉えることは認められない。依他心は有為法であ

り、空理は無為法であるから非一非異と捉えるのが、法相唯識の立場である。

では分別論者とは、具体的に何を指すのか。了義灯（仏教大系本六二四頁）によると、(1)大衆等の四部、(2)大乘異師、(3)小乗師の三説あるものと整理しているが、その場合、問題になるのは、大乘異師であろう。しかし大乘異師が何を指すかは明記されていない。但し論は、すぐ後に「然も契経に、心性浄と説けるは……」と心性本浄説の経文を引いて、会釈を試みており、その契経は、述記に、勝鬘経と明示されている。

したがって、心性浄説をとるものとして勝鬘経が考えられていることはまちがいないが、その心性浄というのは、「心の空に顕わさる真如」を指すのだと会釈されているので、勝鬘経の心性浄説は、そのまま否定されているのではないということの意味している。勝鬘経は、如来藏思想の最も代表的な經典であるから、論のこの段階にあつては、如来藏思想が、

神経質に排斥されてはいないと考えることもできる。もちろん、空理所顕の真如という会通会釈の上においてであることはいうまでもないが。

二

論のこの傾向は、慈恩大師にもうけつがれている。慈恩大師の著作にも、勝鬘經はしばしば引用されている。この傾向は日本の唯識学にまで一貫している。

しかし、同じ心性本淨説の立場、つまり、如来藏思想の經論とされる他のものは、引用されることがきわめて少ない。

見落しも充分ありうることで、正確な数字とはいえないが、一つの目安として見て頂きたいのだが、述記の中に引用される勝鬘經以外の如来藏関係の經論をみると、無上依經7回、旧中辺8回、仏性論3回、宝性論1回、旧真諦論1回、三無性論1回である。義林章になると、あれほど多くの經論を引用する本でありながら、宝性論6回、仏性論、旧中辺、無相論それぞれ1回である。ほとんど問題にならぬ数字といつてよい。しかも見落してならぬことは、如来藏論典の最も整備された大乘起信論が、姿を見せないことである。(三祖の如来藏思想とのかかわりについては改めて検討する予定である。)

三

日本に入つて、護命の大乘法相研神章には全く見当らない。

真興の唯識義私記は、慈恩大師の大乘法苑義林章唯識義林の注釈であるから義林章本文に引用されるものは当然触れられることになる。義林章には、勝鬘經・旧中辺・宝性論・無相論などが挙げられているので私記にも注釈が施されている。義林章本文にないもので私記に出るのは吉藏の勝鬘宝窟と真諦法師説と紹介されるもの、それに、義賓曰として引用される中の馬鳴論くらいのものである。義賓曰は何を指すのであろうか、また馬鳴論とは何なのであろうか。不明である。無相論というのも義林章の本文に引用されておるのも触れられたものであるが、一回は注釈の中で本文と関係なく引用されている(大71・407・中)。しかし、「依用すべからず」と否定的な引用である。

義林章で、如来功德莊嚴經を引いて、如来無垢識を第九識となし、それを阿末羅識と名くといっているのを批判している所があるが、私記も義林章の説をそのまま継承して、淨識は第八識を別開したものであつて、依他の別体があるのではないと述べている(大71・369・上・中)。第八識の奥に第九識を立て、第九識によつて空理と相即させる立場を否定していることである。相即的な如来藏思想は認められてはいない。

四

成唯識論本文抄は、論義の資料集と考えられる。同学鈔と共通の多くのテーマが挙げられているので、論義に関係する

ものであることは明らかである。その論義のテーマに關係する經論の文章が列記されているので、当時（平安末―鎌倉）どのような經論が読まれていたのか、論義のためにどのような經論注疏が準備されていたのかなどの大勢を知るのには大麥都合のよい本であるが、その中にも、如来藏思想關係の經論注疏が準備されている数はきわめて少ない。勝鬘經やその注釈も決して多くはないが、その位置は前述の通り他のものとは異なるのでこれを除いた他の如来藏關係の引用されている箇所を挙げると、次の通りである。

無上依經◎①本性住種姓は真如の理をとるべきか。（大65・722・下）

〔大66・523・中〕

◎②西明の意は本来自性清淨涅槃は即ち是れ諸法通相真如と釈す。灯師何が之を破するや。（〃・768・上）〔〃・571・下〕

不増不減經①衆生界は増減有るべきや。（〃・412・中）〔〃・27・中〕

◎②宗家の意は無余還生の義を許すべきや。（〃・419・中）〔〃・34・上〕

3 同前（〃・〃・下）

仏性論

1 勝鬘經所説の一乘は真実か。（〃・414・上―中）

◎②瑜伽論の五難六答は大乗の実義か。（〃・417・上）〔〃・32・中〕

◎③本性住種姓は真如の理を取るべきか。（〃・722・下）

宝性論

◎④無上依經◎と同じ。

◎⑤自受用身は凝然常住か。（〃・779・中）〔〃・582・下〕

①論中第八識を証するに阿毘達磨經の無始時來界等の文を引く。爾らば教理二証の中何れぞや。（〃・520・上）〔〃・225・中〕

◎2 同前（〃・〃・下）

◎3 仏性論◎と同じ。

起信論

◎①起信論中真如受熏云云。宗家が之を釈するや。（〃・492・上）〔〃・175・上〕

2 地上菩薩実の超劫の義有りと為すや將た如何。（〃・514・下）

◎3 仏性論◎と同じ。

積摩訶衍論

1 起信論◎と同じ。

◎②護法正義の意は有漏第七識、六塵の境を縁すと許すべきや。（〃・561・下）〔〃・289・下〕

梁摂論

1 阿毘達磨經頌の意如何。（〃・483・中）

2 宝性論◎と同じ。

◎③梁摂論中三十三阿僧祇を説く。宗家如何が之を釈するや。（〃・728・下）〔〃・529・中〕

4 同前

◎⑤無上依經◎②仏性論◎と同じ。

◎⑥仏性論◎宝性論◎と同じ。

◎⑦摂大乘論の意は自受用身を以て自性に摂すべきや。

下は、当該経論の引用されている論争のテーマ、◎印は直接その経論が引用されているのではなく、慧沼の能顕中辺慧日論が挙げられていてその中に引用されているものである。○印は、同学鈔の論義に活用されたもので、「」内はその場所を示す。本文抄は論義のための資料集といわれるが、その資料の全部が論義に活用されたかどうかはわからない。現在の同学鈔でみる限り、例えば仏性論⑤の「自受用身は凝然常住か」という問題については、本文抄では、仏性論も宝性論も資料としてあげてあるが、同学鈔のそのテーマについての論義の中では仏性論は引用されているけれども、宝性論の方はとりあげられていないというようなケースがあるわけである。起信論3、釈摩訶衍論1、梁撰論2なども同じである。

本文抄に列記された経論の文章の数は、延べで三千以上と思われるが、如来蔵関係の資料が、いかに少ないかは一見明瞭である。ただ一つ、注目すべきは、僅かではあつても起信論・釈摩訶衍論が登場してきていることであろう。

五

同学鈔には、いまみた本文抄との関係の所を中心として他にも如来蔵思想に関係のある論章が幾つかある。本文抄までは引用された経論の名前・頻度などにのみよつて如来蔵思想への傾向を大雑把に推定してきたのであつたが、同学鈔にお

いては、多少視点を変えてみたい。

同学鈔を全体的にみた場合、(A)如来蔵思想を批判的に扱っている箇所と(B)肯定的受容的に扱っている箇所とに分けられる。法相唯識の流れからいえば(A)の立場が主流であることはいうまでもなく、(B)の立場は注目すべき新しい流れといふことができる。

まず(A)の語句を必要な範囲で抜き出すと次のようになる。法相唯識では、旧訳唯識、あるいは真諦三蔵を如来蔵仏教の系統のものと考えるのでそれも含める。

- 1 真諦等の古師は真如を以て第九識と為し、理事即一の義を成ず。古師の謬説なり。(大66・2・下)
- 2 仏性論は天親の所造と雖も、真諦三蔵翻訳の時、意樂に任せて加増す。謂く天親の本意には非なるなり。(〃・45・中)
- 3 「真如受熏持種は恐らく訳者の誤まりか。」真諦等古徳は、理事の不同に迷いて真如受熏の義を立つ。故に恣に論家の本意を失するなり。(〃・175・中)
- 4 真諦等唐土の古師は理事に混乱す。(〃・220・下)
- 5 但し宝性論の説に於ては、凡そ貞観以前の古師、多く理事不二の義を學んで第八を謬りて以て真如と為す。(〃・226・上)
- 6 他宗は一乘仏性、報仏常住、真如受熏等の義を立つ。源理事相即の謬を起す。(〃・508・中)
- 7 梁撰論は宗家依憑の説に非ず。(〃・529・下)
- 8 処々に両箇八十と云うは随転小乗の説、或は真諦等古師の義

なり。（＼・530・下）

9 起信論説、分明ならず。（＼・586・下）

これによつてわかるのは、これらの思想が、理事不同に迷い、理事相即の謬を起し、理事を混乱し、理事即一の義を成じ、多く理事不二の義を学ぶからであるということである。つまり、法相唯識は理事相即到批判的であることを意味する。なお、3の「」内は智周・演秘の「馬鳴菩薩も亦真如は無を受け種を持すと言う。恐らくは訳者の誤まりか」（仏教大系本六六三頁）をふまえたものである。

このような角度から如来藏系の思想を否定的に批判するのが法相唯識の主流であり、またその論点の違いは、安心とか修行の把握の違いに関わるところであつて、決して安易に妥協しり融合したりし難い問題である。

(B)これに対して、如来藏思想にかかわるものを肯定的受容的に扱うものに次のようなところがある。

1 阿毘達磨經の今頌は兼ねて真理を説く。宝性論の中では迷悟依に拠り、攝大乘等は流転依に拠りて説く。各一義に依る。

（＼・225・下）

2 一頌所説は其の旨包含して広く理事に通ずべし。是を以て護法・賢意二師、各一義を取りて互に一辺を明せり。偏に護法等の論文を守りて宝性論の所説を用いざるは義勢恐くは狭きに似ん。（＼・226・上）

3 若し起信論等の意に依らば即ち色究竟處。処々各辺を存す。

（＼・441・下）

4 起信論中成就菩薩は八相を現す。（＼・527・下）

5 起信論は一切の菩薩、皆三阿僧祇劫を経るを以て……是を以て起信論を見るに、或は超地速成正覺を示し以て怯弱衆生の故と為す。（＼・530・中）

6 起信論の説、之に准じて会すべし。（＼・559・中）

7 若し理事兼説の義に依らば宝性論は一辺を説くが故に証と為すこと疑なし。（＼・574・中）

8 自受用智は、法身を証するが故に所依常の故に法界に遍するなり。故に起信論に云く、法身に依て一切の諸仏現ずる所の色身は一切処に遍す。（＼・583・中）

この中、3、4、5、6は、教証として、起信論を引用する例である。教証として引用するということは、その経論の權威が容認することである。8も同じく、起信論を教証とするものであるが、この場合、自受用智、つまり報身仏の常住性を論義するのに、起信論を論拠として、所依常の故に法界に遍すとなしており、さきの(A)6の報仏常住は他宗の義であり、それは理事相即の謬より起きるのだという批判と微妙にかかわる論旨のところである。所依常という条件のもとにおいてではあつても別の所で批判した報仏常を主張する一段であるから、そこに起信論を持ち出すことは起信論評価がかな

り肯定的なものとなつているといわざるを得ない。

これに対して、1、7は、理事相即の思想内容そのものを一辺の義としてではあつても肯定したものである。1は、阿毘達磨經の無始時来一切界を、そのまま真理とするか、依他起の第八識とするかの解釈の分かれる箇所であり、宝性論は如来藏仏教の立場に立つて真理とし、法相唯識は第八識とするのが正義であるが、そこに、転依の所依の二義、すなわち迷悟依Ⅱ真如、流転依(迷悟依)Ⅱ第八識の説を援用して、宝性論の説を一義としては認したものである。7は、仏果大円鏡智についての論義の所であるが、はからずも議論は阿毘達磨經頌の解釈に及び、1と同じく宝性論説を一辺を説くものと肯定的に評価したものである。2は、1の別義であるが、ここでは、護法も賢意も各一義を取つて一辺を明すのであるから、偏えに護法説すなわち第八識とする説のみを固執するのは内容の把握が狭いのではないかといつてゐる。法相唯識の立場からいえば、護法の説は中道真実義であるべきで、それが一辺の説であるはずはなく、当然、狭義の理解とはいえない。別義であるとしても、法相教義の集大成とも呼ぶべき同学鈔の中にこのような論草が編集されていることは看過し得ない傾向である。1、2、7の相即を是認する傾向と、3、4、5、6、8の起信論を教証とする傾向とは無関係ではあるまい。

如来藏思想関係のものを是認する箇所は決して多くはないが、こういう気運が同学鈔編集の時代にあつたことを窺わせるものである。良遍には、法相唯識を相即門に立つて捉えなおそうとする試みが随所にみられるが、それはこのような歴史的な背景の上に醸成されていったものと考えることができであろう。

(駒沢女子短期大学教授)

新刊紹介

江島恵教著

「中観思想の展開」

— Bhāvanivēka 研究 —

菊判・本文五〇四頁・定価七五〇〇円
春秋社・昭和五十五年二月二十八日刊